

幼児期の環境学習の場を活性化させる保育者の言葉掛けの特徴

The Characteristics of Words Given by Nursery School Teachers and Childcare Workers which Activate the Place of Environmental Learning of Infancy

嶽山 洋志* 河内 勇樹** 美濃 伸之*

Hiroshi TAKEYAMA Yuki KAWACHI Nobuyuki MINO

Abstract: In kindergartens and day nurseries, when children are not well aware of their playgrounds and surroundings, it is particularly important that nursery school teachers and childcare workers should give them any words that give rise to their awareness of those existence so that they can connect their activity with their environment. This research, focusing on the nursery schools and day nurseries willingly applying environmental learning, attempted to identify the characteristics of words given by nursery school teachers and childcare workers which activate the place of environmental learning of infancy and the environmental design organising it. We recognised, through an analysis of the conversations between teachers and workers, and children, there, that the former most often gave the latter the word of ‘Really!?’ – this was used 104 times in the sum of 3106 words – and that they commonly gave them words responding positively to children such as the phrase that ‘It’s true! So that’s something to look forward to eating it!’. Also, the features of teachers and workers’ words contributing to an understanding of children’s environment by using their five senses and drawing children’s interest in the relation between plants and insects and in their growth were extracted from this analysis when applying cluster analysis to the words used over twenty times. With regard to the environmental design, furthermore, we found that plants and pot plants were placed where children can more often perceive them, for example.

Keywords: *infancy, environmental learning, to speak words, environmental design, responding positively*

キーワード：幼児期，環境学習，言葉掛け，環境づくり，共感

1. はじめに

保育者の援助によって子どもたちが動植物や自然環境に心を動かしていくことは、幼稚園や保育所（以下、園所とする）における日常の保育の中で頻りに確認できる。保育所保育指針においても、保育者は三歳以上児に対し「自然との触れ合いにより、子どもの豊かな感性や認識力，思考力及び表現力が培われることを踏まえ、自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること¹⁾」が大切とされ、特に子どもたちが園庭や周辺地域の動植物の存在や環境の変化に気づいていない時、保育者はその気づきを引き出す言葉を彼らに掛けることが重要とされる²⁾。このように環境と幼児をつなぐ媒介者として保育者が果たす役割や工夫は非常に重要であるといえる。

環境学習の場における上記のような保育者の援助に関する研究は、五感を用いるなどの環境学習プログラムの実践に関する研究^{3, 4)}、幼児が身近な自然と触れ合える園庭環境の整備に関する研究^{5, 6)}、絵本などの教材の活用方法に関する研究^{7, 8)}が多く見られるが、保育者の言葉掛けに着目した研究は少ない。言葉の掛け方によって幼児の意識は大きく変化することが指摘されていることから⁹⁾、環境学習の場でも保育者の言葉掛けは非常に重要であるといえる。そこで本研究では、積極的に環境学習を展開している園所を対象に、幼児期の環境学習の場を活性化させる保育者の言葉掛けの特徴と、その時になされた環境づくりの工夫について整理することを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象地の設定

表1に調査対象園所を示す。

より多くの言葉掛けの事例を抽出するためには、環境学習に積

極的に取り組んでいる園所を対象とすることが有効と考え、本研究では兵庫県が実施する幼稚園教諭・保育士環境学習リーダー研修を2007～2009年の間に受講した経験がある183か所のうち調査に協力可能と意思表示のあった表1に示す15園所を調査対象園所に設定した。

(2) 調査および分析方法

図1に調査シートを示す。

調査は2011年5月～2012年1月までの期間、日常の保育の中で幼児との生物や自然物に関する会話を通して主体的な気づきが認められた会話を保育者自身が記録すること、とした。調査者は各園の3～5歳児を担当している保育士36名¹⁰⁾とし、図1に示す調査シートを用いて上記の会話が認められた直後に記入するよう求めた。内容は幼児と保育者の言葉のやり取りが明らかになるよう「幼児の姿」と「先生の援助」について話し言葉で記入を求め、またやり取りがわかりやすいように矢印で会話の順序を示すように求めた。さらにこの会話に至るまでの背景や準備した環境が明らかになるよう、環境づくりとして活動場所や準備物の工夫やその活動に至った経緯についても回答を求めた。本調査用紙は2か

表-1 調査対象園所

幼稚園・保育所の名称	市町名	幼稚園・保育所の名称	市町名
1 愛光幼稚園	芦屋市	9 徳栄寺保育園	姫路市
2 安養保育園	太子町	10 トベラ保育園	加古川市
3 いかわ幼稚園	神戸市	11 フタバ幼稚園	姫路市
4 泉保育園	加東市	12 保城さくらんぼ保育園	姫路市
5 キッズランド八千代	多可町	13 保城保育園	姫路市
6 広英保育園	姫路市	14 ゆりかごの家	相生市
7 石海保育園	太子町	15 六甲藤原台幼稚園	神戸市
8 津井幼稚園	南あわじ市		

*兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 **三田市有馬富士自然学習センター

■幼児の姿（発話や行動）と先生の援助（声かけや行動）

活動名	アゲハの幼虫を育て観察しよう	
実施日	2011年5月17日	
実施場所	トベラ保育園 保育室	
環境構成	幼児の姿（発話や行動）	先生の援助（声かけや行動）
サンショウの木でアゲハチョウの幼虫を育てている。	友だちとチョウの幼虫が載っている図鑑を見つけ、どのように育てていくのかを知る。	
飼育箱は子ども達の目のつきやすいテーブルの上に置き、毎日観察できるようにしている。	「黒から青虫になってチョウチョになるんや」	「どうして」黒色から緑色にかわるのかな
春の虫が載っている図鑑やチョウの絵本も保育室の本棚に準備し、自由に見られるようにしている。	「葉をいっぱい食べるからやん」「葉っぱの緑色にやるんやで！」	「だから葉っぱをいっぱい食べるんだ！」「じゃあチョウになったらまた色かわるよね？」
	「青虫になったら次はいろんな色の葉っぱを食べるんちゃう？」	「そうなのかな？じゃあまた青虫が何を食べるのかみんなでみてみようね」
		育てていく様子が楽しみになるよう言葉をかけた。

図-1 調査シート

月に1度郵送および回収、合計186の事例と、その中で858文の保育者が幼児に掛けた言葉を収集することができた。分析では、まず保育者が使用した言葉掛けの特徴を捉えるべく、出現回数が2桁以上であった単語の平均である20回を1つの基準とし、それより多い単語を把握するとともに、それらの単語と858文の行列表からJaccard係数を算出、Ward法によるクラスター分析を適用することで、出現回数の多い単語同士の組み合わせから言葉掛けの特徴の傾向を定量的に把握した。次にそれぞれの会話の中で保育士の言葉掛けとそれに対する幼児の発話とをセットにし、言葉の掛け方が似たものをグループ化することで、言葉掛けの特徴を定性的に把握した。なお分析に際しては「ほんとかだね」を「本当だね」に、「おった」を「いた」に修正するなど省略された言葉や方言を統一する前処理を行った。また環境づくりの工夫を把握すべく表3に示す4つの視点から整理を行った。

3. 結果および考察

(1) 保育者が用いる単語の特徴

表2に抽出できた20回以上出現の単語とその出現回数を、図2に利用頻度の高い各単語の関係を示す。

表2より最も多かった単語は「本当」で3106語中104回確認できた。これは「本当だね、食べるのが楽しみだね」「本当だ！よく気がついたね！」など幼児の発言に対して共感する言葉掛けが多いことによると考えられる。また「食べる」が48回、「触る」が22回、20回未満であったが「匂い」が18回、「音」が16回と五感に関する言葉掛けも多いことがわかった。さらに対象物としては「葉っぱ」が48回で最も多く、その中でも「茶色い葉っぱがあるね」「葉っぱのじゅうたんだね」など落葉や紅葉に関する言葉掛けが41.7% (20回)、「虫さんが葉っぱを食べるからだよ」「オクラの葉っぱ、たくさん食べられちゃってるね」など昆虫などの動物が出現する言葉掛けが20.8% (10回)と多いことがわかった。これは、前者は季節変化があること、後者は昆虫とのつながりがあることから活用される回数が多くなったものと考えられる。

次に図2より利用頻度の高い各単語の関係を捉えると、まず「出来る」「本当」「たくさん」で群が形成され、「(幼児)先生みて！ありさんがいる！」「(保育者)本当！たくさん歩いているね」など共感の言葉掛けであることがわかる。五感に関してみると「見る」という言葉掛けは「色」と同一群であり「緑色がはっきり見えるね」「わー、きれい！！前に見たときは緑色やったのに、なん

表-2 抽出できた20回以上出現の単語とその出現回数

	抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
1	本当	104	7	土	25
2	大きい	50	8	色	22
3	食べる	48	9	触る	22
4	葉っぱ	48	10	たくさん	21
5	出来る	41	11	出る	21
6	見る	36			

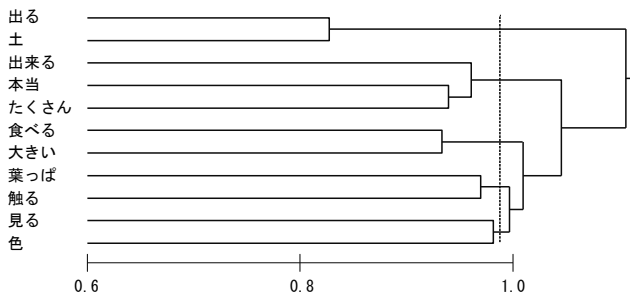


図-2 利用頻度の高い各単語の関係

で色が変身したのだろう」など、主に自然の色を注視させていることがわかる。また「触る」という言葉掛けは「葉っぱ」と同一群であり「(保育者) さっき、カキの木とミカンの木を比べてでしょう？ここにも落ちていたケヤキとこの木の緑の葉っぱがあるんだけど触って比べてみようか」「(幼児) こっちはツルツル、サラサラしているけど、こっちはザラザラ。なんかカシャカシャ音もする」など、主に葉の感触を体感させていることがわかる。さらに「食べる」という言葉掛けは「大きい」と同一群であり「レタス大きくなったからみんなで食べてみようか」「でも大きくなりすぎると、固くて食べられないんだよ」など、主に植物の生長との関係で語られていることがわかる。同様に「出る」と「土」は同一群であり「(幼児) セミはここから出るんだね」「(保育者) そうだね。土の中から出るんだね」や、「土に埋まったら芽が出る。そして木になるんだよね」など、動植物の生長に着目した言葉を用いる傾向が伺えた。

(2) 言葉掛けのタイプ

図3に会話の文脈から捉えた保育者の言葉掛けの特徴を示す。

図3より保育者の言葉掛けは総数556事例で、大きく「幼児の発話に対して共感する言葉 (205回)」「ヒントを提示して幼児の気づきを促す言葉 (206回)」「生物の親しみを一層深める言葉 (95回)」「その他 (86回)」の4タイプがあることがわかった。各タイプの詳細は以下のとおりである。

1) 共感

前述したとおり保育者は幼児の発言に対して共感することが多く具体的な幼児とのやり取りの中でも共感する言葉を173回も掛けていることが明らかとなった。また「褒める」こと (18回) や「幼児と同じ目線で提案する」こと (10回)、「保育者も一緒に活動する」こと (4回) も共感の一種として整理され、このように幼児の気持ちに共感したり寄り添ったりする言葉掛けが重要であることがわかる。

2) 気づきの促し

幼児の疑問に即答するのではなく、幼児自らが気づく促しをしたりイメージが広がる促しをしたりする、「想像させる」言葉掛けは50回確認できた。具体的な事例としては、

- (幼 児) 先生みて！ありさんがいる！
- (保育者) 本当！たくさん歩いているね。
- (幼 児) お菓子見つけた、って言ってる！
- (幼 児) となりのお家にある、って言ってる！

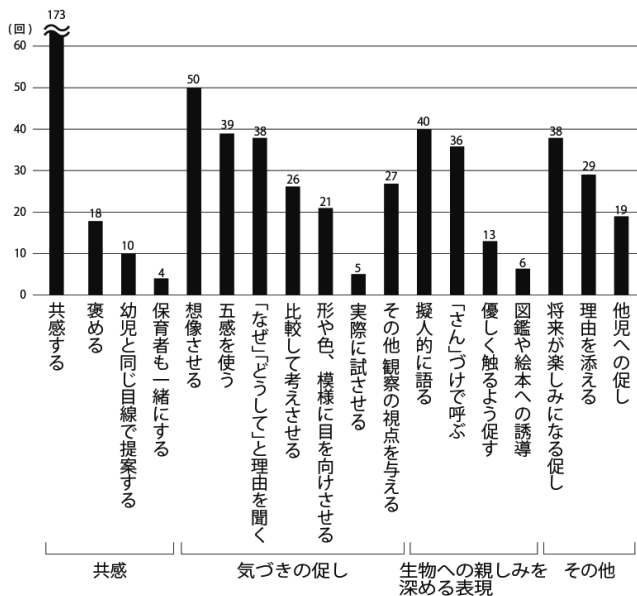


図-3 会話の文脈から捉えた保育者の言葉掛けの特徴

(保育者) ありさんのお家ってどこにあるのかな？
 (幼児) あっち？ こっち？
 (保育者) ありさん、どこまで歩いて行ってる？
 (幼児) 穴に入った！
 (幼児) 穴から出てきた！
 (幼児) これがお家？
 (保育者) お家が見つかったね。

といったやり取りがあり、幼児の「となりのお家にある、と言ってる！」という発話に対して保育者は「ありさんのお家ってどこにあるのかな？」と棲み家をすぐに教えるのではなく自分で探す機会を与えていることがわかる。また自分で見つけることができるよう「ありさん、どこまで歩いて行っている？」と観察のヒントを与えることも工夫の1つとして重要だと思われる。

次に五感を使った気づきの促しは39回確認でき、具体的な事例としては、

(幼児) わーすごい！葉っぱがたくさんある～。
 (保育者) 本当だ！たくさん落ちているね。
 (保育者) いい音がするね！どんな音？
 (幼児) シャワシャワ、って音がするー！
 (幼児) パリ、っていう！いい音ー。

といったやり取りがみられた。この事例では「わーすごい！葉っぱがたくさんある～」といった幼児の発話に対し、「本当だ！たくさん落ちているね。いい音がするね！どんな音？」と踏み時の音を言葉で表現する機会を作り、幼児は「シャワシャワ、って音がするー！」と応えるといった音に注目させ、表現活動につなげる言葉掛けなどが見られた。なお、五感を通じた気づきの促しでは「何の匂いかな？」といった匂いに注目させる言葉掛けが17回と最も多く、食体験による自然の特性理解を促す言葉掛けは3回と最も少なかった。保育者の食体験を促す言葉掛けが少ないことから、直接食べることができる植物を園庭に植栽するなど身近な環境のあり方を工夫する余地があると思われる。

次に「なぜ」「どうして」と自然の不思議に対して、その理由を考えさせる言葉掛けが38回確認できた。具体的なやり取りとして、

(幼児) ミノムシだ。
 (保育者) あんな高いところにいるんだね。よく見つけたね。
 (幼児) 全然動かないいなー。
 (保育者) 動かないね。どうしてだろう？

(幼児) 分かった！寒いからお家の中で寝てるのと違う？

(保育者) そうだね。きっと寝ているのかな。

といった事例が確認できた。動かないミノムシを見て「全然動かないいなー」と幼児が発した言葉を受けて「動かないね。どうしてだろう？」と保育者がその理由を問うている。それを受けて幼児は「分かった！寒いからお家の中で寝てるのと違う？」と、生物の気持ちを想像するとともに、それを確認すべく図鑑で調べるなどより発展的な活動につながる。このような自然の不思議に関する質問だけでなく「この葉っぱ、何でギザギザになってんだろう？」など生き物同士の関わりあいを見通した質問も確認できた。

さらに「みんなとすすき、どっちの背が高い？」など、他者との比較から気づきを引き出す言葉掛け(26回)や、「どんな形してるかな？」「このトンボの目、何色かなあ」など形や色、模様についてヒントを提供し気づきを引き出す言葉掛け(21回)が多く確認できた。具体的な事例としては、

(幼児) 先生、みて！

(幼児) ほら、これ、オレンジの匂いがする

(保育者) わあ、本当だあ、大きいね。どこで見つけたの？

(幼児) ここ。

(幼児) 先生、こっちにもあるよ。

(保育者) いろんな形がたくさんあったね。

(保育者) 匂いも違うのかしら？

(幼児) あっ、これなー、レモンみたい。

(幼児) これは、なんか、すっぱい匂い。

といったやり取りが挙げられ、直接匂いを比べることで自然の多様性に気づく機会になっていることが分かる。

その他には、ホオズキの中に何が入っているか興味を示している幼児に対して「どうなってるかな？開けてみようか？」と実際にすることを提案する言葉掛け(5回)が確認できた。

3) 生物への親しみを深める表現

生物への親しみを深める表現として、まず「擬人的に語る」ことが40回と多く確認できた。具体的な事例としては、

(保育者) このアサガオの葉っぱ、触ってみてー。

(幼児) フワフワしてる。すごい！

(保育者) フワフワしてるでしょう！葉っぱの周りに小さい毛があるからだよ。

(幼児) あっ、本当だ。生えてる！

(保育者) この毛が生えた葉っぱがたくさん出てくるから、楽しみにして育てようね。

(幼児) うん、お水あげー！

(保育者) お水をあげると大きくなるもんね。アサガオさんのど乾いたよーっていつてるよ。

(幼児) アサガオさん、たくさん飲んでね。

といったやり取りからも分かるように、保育者の擬人的な語りと呼応して幼児も「アサガオさん、たくさん飲んでね」と優しい気持ちを持つことが出来ている。同様に親しみを深める言葉掛けの工夫として「さん」づけが挙げられ、上記の事例でも「アサガオさん」と表現されるなど、36回確認することができた。このような擬人的な会話のやり取りによって、幼児は動植物を人間に近い存在として受け止め、思いやりの心を持って接する姿勢を持つようになっていくと思われる。

4) その他

その他としては「将来に期待させる言葉」が38回、「理由を添える」言葉掛けが29回、「他児への促し」が19回確認できた。「将来に期待させる表現」では、

(幼児) カマキリがコオロギを食べてる！

(保育者) 本当だね。食べてるね。

(幼児) おなかすいたのかな？

(幼 児) 赤ちゃん産むのかな？

(保育者) 赤ちゃんカマキリが産まれてくるかな。楽しみだね。といったやり取りがみられ、「楽しみだね」と期待を持たせる言葉掛けは、興味を持続させる意味で有効と思われる。

(3) 環境づくりの工夫と言葉掛けの関係

表3に環境づくりの工夫と言葉掛けの関係を示す。

表3よりまず保育者が行った環境づくりの工夫を捉えると、①自由遊びに貢献する環境づくりの工夫が17事例、②観察に貢献する環境づくりの工夫が10事例、③園外散歩に貢献する環境づくりの工夫が8事例、④図鑑調べや読み語りに貢献する環境づくりの工夫が28事例みられた。

次に①の工夫の中で、幼児らが良く見える場所の環境を豊かにする(13事例)は自然環境に対する意識を高める上でも重要と思われる、具体的な場所は「保育室の前」「靴箱の上」「正門近く」の3か所が挙げられた。また野草・落ち葉・動物の痕跡を残す(4)は、季節感の獲得や地域の自然環境理解につながることから重要な工夫だといえる。以上の自由遊びに貢献する環境づくりの工夫と図3に示す言葉掛けの特徴との関係を見ると、最も使用頻度の高い言葉掛けは「共感する」で64.7%、次いで「五感を使う」で41.2%であった。後者が高かった理由は、普段の保育の中でこの言葉掛けは特別な準備を必要とせず実施できるが、身近な園庭環境が自然豊かな場であることでより五感を使った体験が日常的に可能となり、そのような言葉掛けが多くなったものと思われる。

②としてはチョウの食草・食樹を植える(3)、ルーペなど観察用具を用意する(7)が工夫として挙げられた。「チョウ」は単語の出現回数としては11回であったものの、「アオムシ」の8回を加えると19回となり出現回数の多い単語であった。その理由としては、チョウは変身することや食草・食樹との対応があり自然の不思議や生き物同士のつながりを理解できる機会となることが挙げられ、そのような気づきの機会が得られるよう環境づくりの工夫として取り入れられているものと思われる。以上の観察に貢献する環境づくりの工夫と言葉掛けの特徴との関係を見ると、使用頻度の高い順に「共感する」で70.0%、次いで「理由を添える」で40.0%であった。後者が高かった理由は、観察で気づいた生き物の不思議な生態などの理由を説明することで幼児の学びが深まる機会が多かったことによるとと思われる。

③としては、地域とのつながりを作っておく(4)、動植物が豊富な場所や季節感のある場所を散歩する(4)が重要で、地域と協力

表-3 環境づくりの工夫と言葉掛けの関係

①自由遊びに貢献する環境づくりの工夫(17)
幼児らが良く見える場所の環境を豊かにする(13) ex: いつでも見られるように靴箱の上に飼育ケースを置いている 野草・落ち葉・動物の痕跡を残す(4) ex: ヒナが巣立ったツバメの巣はそのままに残しておく
◆使用頻度の高い言葉掛け:「共感する(64.7%)」「五感を使う(41.2%)」
②観察に貢献する環境づくりの工夫(10)
チョウの食草や食樹を植える(3) ex: 園庭にチョウの食樹であるサンショウを植える ルーペなど観察用具を用意する(7) ex: レンズ付観察ケースやルーペなどを用意する
◆使用頻度の高い言葉掛け:「共感する(70.0%)」「理由を添える(40.0%)」
③園外散歩に貢献する環境づくりの工夫(8)
地域とのつながりを作っておく(4) ex: 地元の農家の方と協力関係を作っておく 動植物が豊富な場所、季節感のある場所を散歩する(4) ex: いろんな草花や小動物に触れられる畔道を散歩コースにする
◆使用頻度の高い言葉掛け:「共感する(50.0%)」「想像させる(37.5%)」
④図鑑調べや読み語りに貢献する環境づくりの工夫(28)
関連する図鑑や絵本を用意する(28) ex: トマトの図鑑を自由にみられるよう本棚に置いておく
◆使用頻度の高い言葉掛け:「共感する(78.6%)」「想像させる(67.9%)」

※自由遊びとは幼児が自分で好きな遊びを見つけそれをする時間

関係を構築することで園ではできない体験を幼児に提供することができる。以上の園外散歩に貢献する環境づくりの工夫と言葉掛けの特徴との関係を見ると、使用頻度の高い順に「共感する」で50.0%、次いで「想像させる」で37.5%であった。後者が高かった理由は、園庭では体験できない自然環境との出会いが豊富に存在することで、「これ何かな?」など想像させる機会を多く作ることができたことによるとと思われる。

最後に④としては関連する図鑑や絵本を用意する(28)が重要とされ、具体的には「カマキリが見られるようになってきたので、カマキリの本を置く」など、季節の動植物に合わせて関連する図鑑や絵本を用意することで、幼児のより深い学びの支援に繋がっている。以上の図鑑調べや読み語りに貢献する環境づくりの工夫と言葉掛けの特徴との関係を見ると、使用頻度の高い順に「共感する」で78.6%、次いで「想像させる」で67.9%であった。後者が高かった理由は、図鑑を提供することで動植物に対する疑問を幼児が抱き、想像させる機会を多く作ることができたことによるとと思われる。

4. まとめ

以上のように、本研究では幼児期の環境学習の場を活性化させる保育者の言葉掛けの特徴と環境づくりの工夫を整理した。結果、保育者の言葉で最も多かった単語は「本当(3106語中104回出現)」で、「本当だね、食べるのが楽しみだね」など幼児の発言に対して共感する言葉掛けが多いことがわかった。さらに五感を使って気づきを促したり他者と比較して考えさせたりといった気づきの促しや、擬人的な語りや「さん」づけで呼ぶなど、生物への親しみを深める表現などが保育者の言葉掛けの特徴として抽出された。以上のような言葉掛けの工夫は保育の現場だけで用いられるものではなく、広く幼児を対象とした環境教育や環境学習を展開する際に留意すべき視点であるといえる。家庭での幼児に対する言葉掛けで保護者が意識することも重要であろう。環境学習の場における言葉の使い方、広く幼児期の環境学習に関わる人々に意識してもらおうべく、今後は普及方法などを検討していきたいと思う。

補注及び引用文献

- 1) 厚生労働省(2008): 保育所保育指針, フレーベル館, 35.
- 2) 兵庫県健康生活部環境政策局環境学習課(2008): ちきゅうとなかよしはじめのいっぽ—幼児期の環境学習・教育実践事例集—, 11.
- 3) 腰山豊(1998): 幼児の環境教育に関する実践的研究, 日本保育学会大会研究論文集(51), 730-731.
- 4) 河内勇樹・嶽山洋志・美濃伸之(2011): 幼稚園および保育所における五感を通じた自然体験の現状, ランドスケープ研究74(5), 647-650.
- 5) 田邊龍太(2007): 乳幼児の発達における園庭ビオトープの価値, 環境情報科学35(4), 42-46.
- 6) 柘植純一・行方春香・安井美恵子(2013): 幼児が身近な自然と触れ合える環境の整備—幼稚園におけるバタフライガーデンの設置と活用—, 環境教育052, Vol.22 No.3, 22-29.
- 7) 長根利紀代(2005): 保育実践における子どもの発達と絵本の活用についての一考察, 名古屋柳城短期大学研究紀要第27号, 69-81.
- 8) 内田友梨恵・嶽山洋志(2012): 里山のくらし体験キットの開発と実践, 日本環境教育学会第23回大会研究発表要旨集, 69.
- 9) ドロシー・ロー・ノルト(2004): 子どもが育つ魔法の言葉, PHP研究所, 120.
- 10) 対象とした園所は本文記載の研修を受講するなど、保育士や園児の属性に関係なく環境学習の積極的な取り組みが園所全体で日常的になされていることから、それらが本論の言葉掛けの内容に影響することはないと判断し、属性を絞らず会話が成立する3~5歳児を担当している保育士を対象とすることとした。